

淡路島の弥生時代鉄器製作遺跡における漁具の位置

伊藤 宏 幸

はじめに

二〇〇七年、五斗長垣内遺跡で発見された鍛冶遺構とそれに関連する遺物は、弥生時代後期の淡路島で鉄器が製作されていたことを明らかにした。その内容は、当時の東部瀬戸内地域における鉄器製作の様相を明らかにするとともに、弥生時代の鉄器研究にも一定の役割を果たすこととなった。その後、二〇一六年には、同遺跡の北約六キロメートルに位置する舟木遺跡でも同時代の鉄器製作に関する遺構や遺物が確認された。この遺跡で出土した鉄器の組成や鉄器製作に関連する遺構や遺物、さらにそれらが確認された集落の構造には五斗長垣内遺跡との違いがあることも明らかになっている。その一つに漁具がある。

今回、それらの鉄器製作遺跡で出土した漁具のあり方を比較し、弥生時代における鉄器製作との関係性を検討してみたい。

一、弥生時代後期の淡路島

鉄器製作と漁具との関係を検討する前に、それらの遺跡が営まれた弥生時代後期における淡路島の様相をみておきたい。

弥生時代中期から後期へと移行する時期には、集落立地の変化をはじめ、青銅器祭祀や墓制の変化などが認められることから、社会に大きな変化のあったことが想定されている。近年、その背景に大きな気候変動があり、それが一つの要因になったとする研究成果も公表されている。¹⁾

要因はさておき、その時期の淡路島では、数多

く確認されている銅鐸など、中期以前に用いられた青銅器の多くが埋納され、姿を消していくことが知られているほか、平野に営まれた集落が衰退し、丘陵上に新たな集落が出現するなどの変化が認められている。特に、集落立地の変化は、丘陵地形が多くを占める島北部に顕著であり、後期に営まれた丘陵上の遺跡数は中期に営まれた平地の遺跡の一〇倍以上に達する(図1)。今回検討する鉄器製作遺跡は、そのような弥生時代後期に丘陵上に出現する遺跡の一つである。

なお、その時期の土器の編年は地域毎に細分化され、時代の変化を測る物差しとして使用されているが、淡路島における編年はいまだ確立されておらず、周辺地域の編年案を参考に用いられている状況である。そのような中、舟木遺跡では遺構から出土した土器を単位として、集落が継続する後期から終末期までを九期に細分する案が提示されている²⁾。それによれば、後期前半を一期〜三期、後期後半を四期〜六期、終末期を七期〜九期に区分する。今回検討する対象は、その舟木遺跡が立地する淡路島北部地域が中心であることが

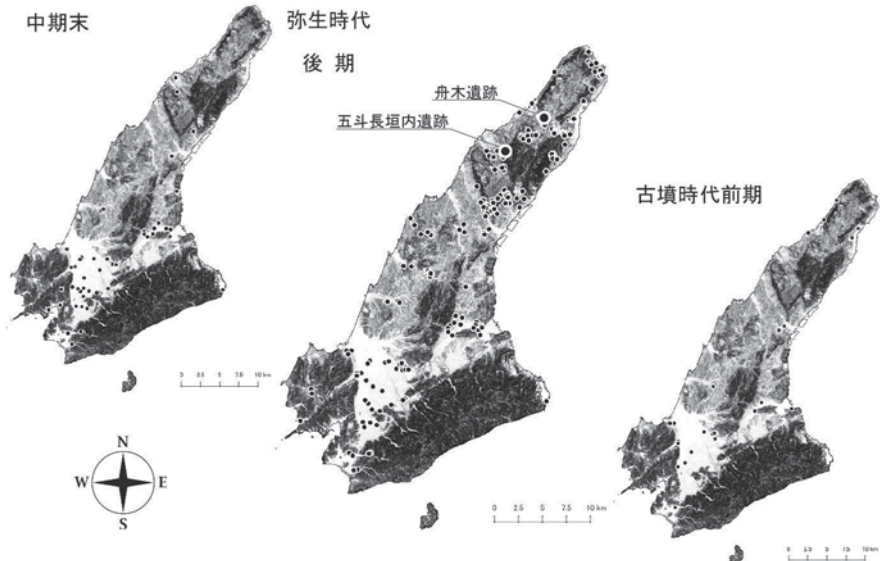


図1 集落立地の変化と五斗長垣内遺跡・舟木遺跡の位置

ら、ここで用いる時期区分は、その編年案によるものとする。

二、五斗長垣内遺跡の鉄器製作と漁具

(一) 五斗長垣内遺跡の特徴

五斗長垣内遺跡は淡路島北部、播磨灘を望む標高一五〇〜二〇〇メートルの丘陵上に立地する。発掘調査で発見された二三棟の竪穴建物跡の内、半数以上の一二棟が鉄器製作を行った鍛冶工房であることが確認されている(図2)。その中には、SH―三〇二のような竪穴の直径が一〇メートルを超える巨大な建物が発見されている。このような大型の建物はいずれも鍛冶工房であり、鉄器製作の開始とともに出現し、終焉を迎えるまで存続することから、鉄器製作のために建てられたものと想定されている。なお、鉄器製作は集落が終焉を迎えるまで絶え間なく継続する。このような様相から、鉄器製作に特化した「鍛冶のムラ」とも表現されている遺跡である。

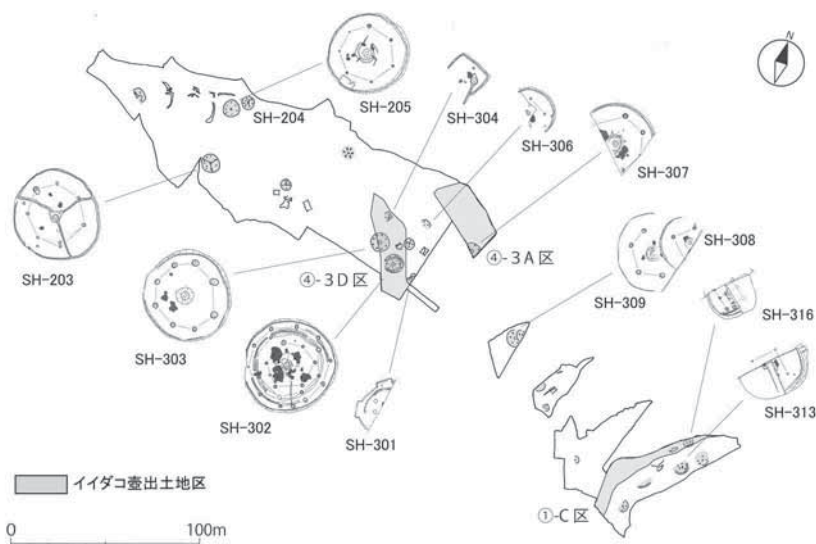


図2 五斗長垣内遺跡の鍛冶工房建物検出位置と漁具の出土地区

(2) 五斗長垣内遺跡の鉄器製作

五斗長垣内遺跡で行われた鉄器製作には、次のような特徴が認められる。まず鍛冶炉であるが、鍛冶工房建物跡の床面には鍛冶作業に使用された炉跡が残されている。この遺跡で確認された炉は、いずれも床面の一部分が赤く変色した状態で検出されている。この状態は、床の上（地面）に直接燃料（木炭）を置くことにより、熱を受けた範囲が赤く変色したものと考えられている。このように、地面を掘りくぼめることをせず、平らな床面をそのまま炉床とする簡素な構造の炉は、IV類鍛冶炉とよばれている。

鍛冶工房建物跡には炉以外にも鍛冶作業に用いた台石やハンマー、砥石といった石製の鍛冶具、鉄器などが残されている。鉄器の大半は用途不明の鉄片で、それらは製品を製作する際に生じる切れ端などの残片や素材の一部と考えられている。製作された鉄器は、鉄鏝や鉋、鑿など小型の工具類が多く、鉄剣などの大型の鉄器は認められない。このような様相から想定できる鉄器製作技術は、簡素な構造の炉を用い、薄い板状の鉄素材を折り

曲げたり切断したりすることにより、小型の鉄器を製作する単純なものであったことが想定されている。

この遺跡で鉄器製作が始まるのは、弥生時代後期中葉の舟木三期（以下、舟木は省略）にあたる。集落は後期前葉の二期に出現するが、その時期には石器製作が行われた建物跡（SH―二〇四）が発見されており、多数の石器が出土していることから、鉄器製作は行われていなかったと考えられている。三期に出現する鍛冶工房建物跡は、その後六期までの各期に絶えることなく営まれ続けており、鉄器製作が終焉を迎える六期に最大規模の工房建物SH―三〇二が営まれることになる。このような様相からは、三期に始まる鉄器製作が後期末の六期まで順調に進展していったものと考えられる。しかし、それ以降の時期に建てられた建物は確認できず、順調に進展してピークを迎えた鉄器製作は突然のごとく終焉を迎え、それとともに集落も丘陵上から姿を消してしまうことになる。これが、弥生時代の「鍛冶のムラ」で行われていた鉄器製作の様相である。

(3) 板状鉄斧と鑄造鉄斧

鍛冶工房建物跡の一つSH—三〇三とよばれる竪穴建物跡から出土した鉄器に、完形の板状鉄斧と鑄造鉄斧の刃部片がある(図3)。これら二点の鉄器は、建物の壁際で銹着した状態で出土している。

全長一七、八センチメートルの板状鉄斧は、撥状に開く刃部の形状や製作時の鍛打の技術から、朝鮮半島製であることが指摘されており、中国製と評価される鑄造鉄斧の刃部とともに、列島外で製作された鉄器と考えられる。このような舶載鉄器が何のために、どのような経路で持ち込まれたのかは定かではないが、周囲が海に囲まれた島に所在する本遺跡の環境から、眼下に望む播磨灘を渡って持ち込まれたものと考えられる。

(4) 五斗長垣内遺跡の漁具

丘陵上に立地するこの遺跡と海とのつながりを知ることができる遺物に漁具がある。本遺跡では一〇点のイイダコ壺が出土している(図3)。い

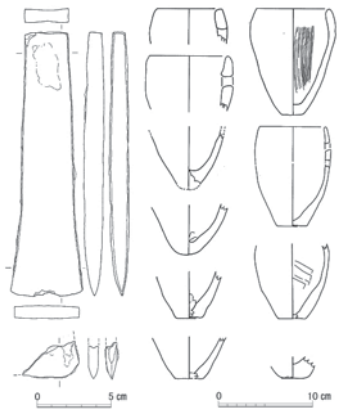


図3 舶載鉄器と漁具

ずれも破片の状態で出土した土器であり、完形のものも存在しない。コップ型で、体部下半が細くすぼまり、底部に至る形態である。口径が七〜八センチメートル、器高が約一〇センチメートルで、口縁部下に円孔一穴を穿つ。底部が残る八点の内、丸みを帯びた尖底のものが二点で、残り六点は直径約三センチメートルの小さな平底を有する。これらの特徴から、鉄器製作が行われた弥生時代後期に使用されたイイダコ壺であると考えられる。

これらが出土した場所は限られた地区に集中する(図2)。その一つは丘陵に近い遺跡東端の①—C区で、半数を占める五点が出土している。残りの五点は遺跡中央部の④—3区で、その内四点は④—3D区、残り一点が④—3A区である。い

ずれも遺物包含層などから出土したものであり、遺構から出土したものは存在しない。ちなみに①—C区は、鍛冶工房建物跡SH—三二六のほか、他の地区にはみられない焼土や炭化物を含む土坑三基が検出されている。一方、④—3区は、前述の板状鉄斧や鑄造鉄斧片が出土した鍛冶工房建物跡SH—三〇三をはじめとする大型工房建物が集中する地区で、集落の中心的な場所に相当する。

現在のとこ、このような漁具が海岸からおよそ三キロメートル離れた丘陵上の「鍛冶のムラ」でどのような用途に使用されたのかは定かではないが、限られた場所に集中して出土する状況は、特定の場所で、特別な用途に用いられたことが想定できるのではなからうか。いずれにせよ、弥生時代の鉄器製作が行われた集落が海とのつながりを有していたことを示す遺物である。

三、舟木遺跡の鉄器製作と漁具

(一) 舟木遺跡の特徴

舟木遺跡は、五斗長垣内遺跡の北約六キロメー

トルに位置する。標高一五〇〜二〇〇メートルの丘陵上に立地し、後期を中心に営まれ、古墳時代に継続しない点は五斗長垣内遺跡と共通するが、後期初頭の一期に出現し、終末期の九期まで継続する存続期間は五斗長垣内遺跡よりも長い。

この遺跡の特徴の一つは、南北約八〇メートル、東西約五〇メートルもの広大な面積を有する点である。遺跡範囲はA〜Lの一二地区に区分され、発掘調査が行われているが、現在、調査が実施された面積は全体の二パーセントにも満たない。その中で二四棟の竪穴建物跡が発見されている。その内の八棟が鍛冶工房あるいはその可能性が高い建物であることが確認されており(図4)、五斗長垣内遺跡と同じように鉄器製作がおこなわれていたことが確認されている。

その他、後漢鏡片などの希少な遺物の出土や祭祀遺構の存在など、淡路島の他の弥生遺跡では認められない特徴を有していることから、弥生時代後期に急増する「丘陵上遺跡群の中心的集落」と想定されている。

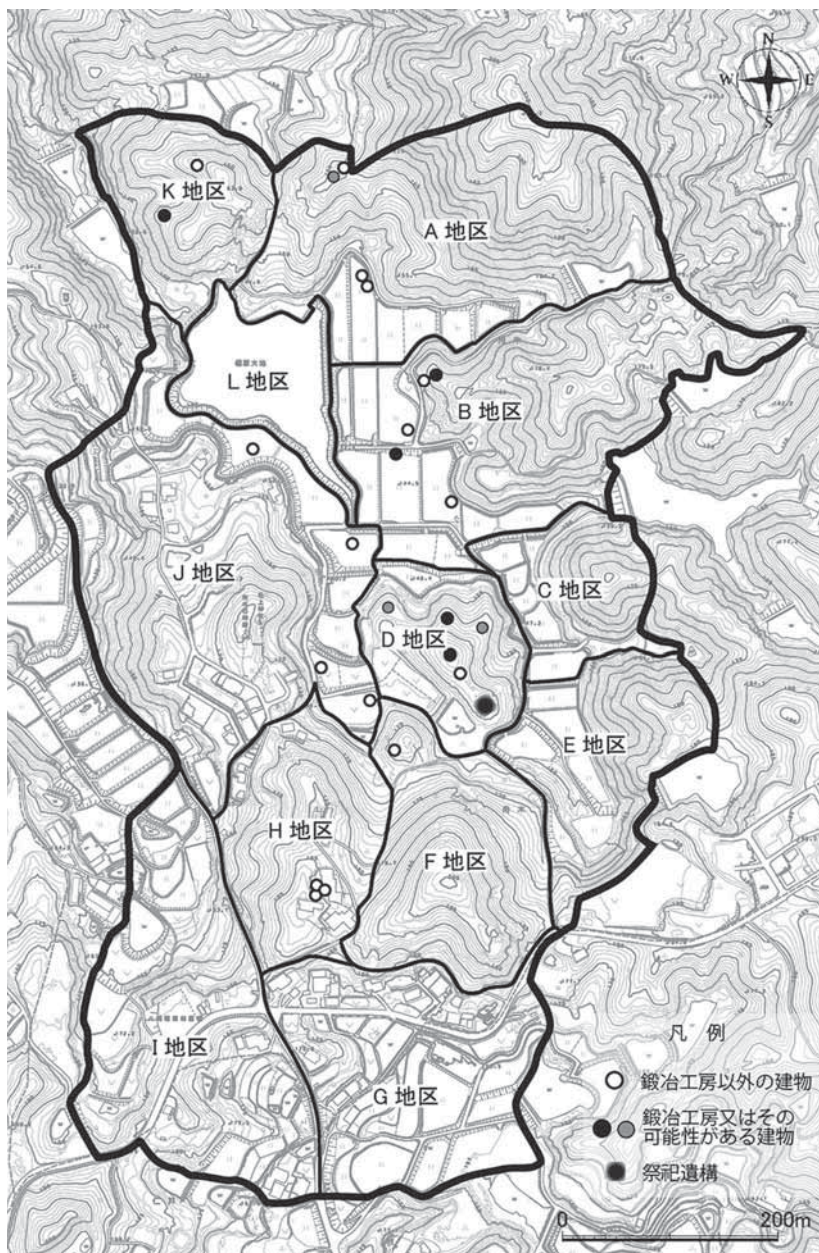


図4 舟木遺跡の地区割りと弥生時代の主な遺構の位置

(2) 舟木遺跡の鉄器製作

この遺跡で行われた鉄器製作の特徴は、堅穴の直径が一メートルもある大規模な工房(図5)が営まれている点、IV類鍛冶炉が中心である点、石製の鍛冶具を用いた作業である点、主に小型の鉄器が製作されている点など五斗長垣内遺跡との共通点が多く、用いられた鍛冶技術も同じ発展段階にあったものと考えられる。

その一方で、集落の規模や構造、存続期間に差が認められるように、鉄器製作に関しても若干の差が認められる。その一つは、出土した鉄器に占める製品の割合が高く、製作された小型鉄器に針状の製品が多く認められる点である。これらの様相は、製作された小型鉄器が何らかの手工業生産に用いられていたことを示しているのではないかと指摘もある^⑤。

この遺跡で鉄器製作が始まる時期は後期中葉にあたる三〜四期で、五斗長垣内遺跡とほぼ同時期である。後期初頭に遺跡中央部で始まる集落は、鉄器製作の開始とともに範囲が拡大し始め、後期後半に最大規模となる。後期末の六期に営まれた

鍛冶工房建物は遺

跡北端のK地区で

も確認されており、

鉄器製作の進展と

ともに集落規模が

拡大した様子をみ

ることができ

る。しかし、その後

に続く終末期の遺構

や遺物が確認でき

る範囲は、遺跡中

央部のD地区を中心とする範囲に集約され、集落

規模が縮小していく様子が看取できる。この地区

では当該期の鍛冶工房建物跡が確認されており、

五斗長垣内遺跡が鉄器製作とともに終焉を迎える

時期においても鉄器製作は依然として継続してい

ることが明らかになっている。しかしながら、古

墳時代の土器が一点も出土していないことは、舟

木遺跡における鉄器製作が終末期をもって終焉を

迎え、それと同時に丘陵上から集落が姿を消すこ

とを示唆している。



図5 大型鍛冶工房建物

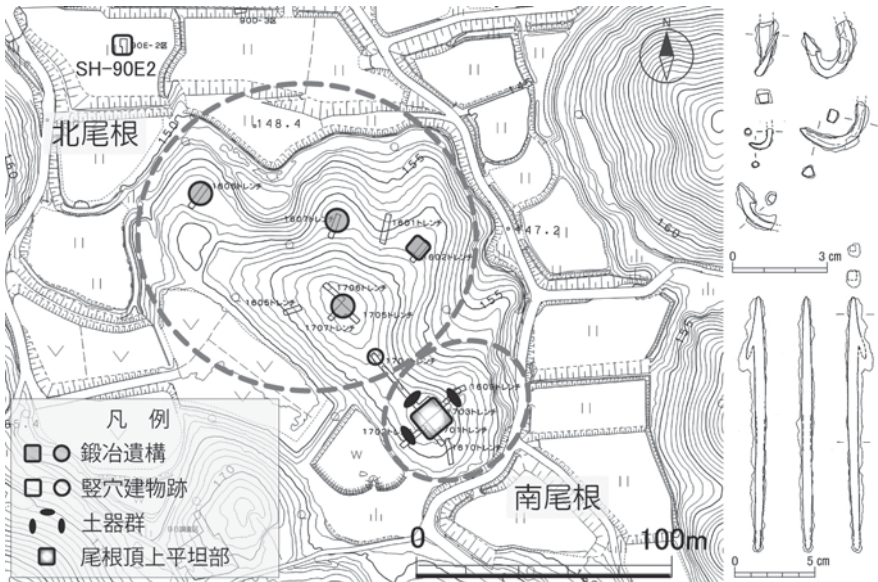
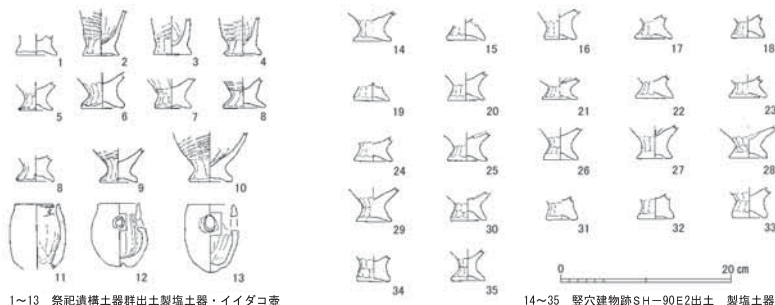


図6 D地区尾根の遺構の位置と鉄製漁具実測図

(3) 生産域から独立した祭祀域の存在
 遺跡中央部に存在するD地区の尾根は、中央や南に存在する鞍部を境として北と南に分かれる地形的特徴を有する。調査の結果、北尾根には頂上部や中腹の平坦部に竪穴建物を設け、鉄器製作を行っていたことが確認されている。一方、南尾根では明確な建物は確認されず、平坦な頂上部を中心に、三方の斜面に多数の土器が集中する土器群の存在が確認されている(図6・7)。土器群には、完形の土器を多数含み、絵画土器やモモの炭



図7 南尾根の土器群と土器



1~13 祭祀遺構土器群出土製塩土器・イイダコ壺

14~35 竪穴建物跡SH-90E2出土 製塩土器

図8 イイダコ壺及び製塩土器実測図

化核など、他の地区ではみることのできない遺物が出土している。これらの状況から南尾根は、生産域として利用された北尾根とは異なり、何らかの儀礼的行為が行われた祭祀域とでもよべる空間として利用されていたものと考えられている。なお、大量に投棄された土器群には多数の鉄器が共存しており、ここで行われた儀礼的行為に鉄器が用いられた可能性が指摘されて

いる。

これらの遺構は、後期末から終末期にかけて営まれたものであり、集落の規模が縮小し、このD地区尾根を中心とする範囲に集約されていく中で残されたものである。

(4) 舟木遺跡の漁具

D地区の南尾根で検出された土器群の中に多数の鉄器が共存することは前述のとおりであるが、その中にヤスや釣針などの漁具が含まれている。ヤスは全長一六、二センチメートルの完形品であり、使用可能なものである。また、釣針は大小四点出土している(図6)。当時貴重であった鉄器の中でも特に希少とされる漁具が、使用可能なものを含め多数用いられていることは、この遺跡で営まれた鉄器製作と海との関係の深さを物語っているものであろう。

また、そのほかにも土器群からはイイダコ壺や製塩土器といった漁具が出土している(図8)。イイダコ壺は一〇点で、全てコップ型であるが、五斗長垣内遺跡で出土しているイイダコ壺とは少

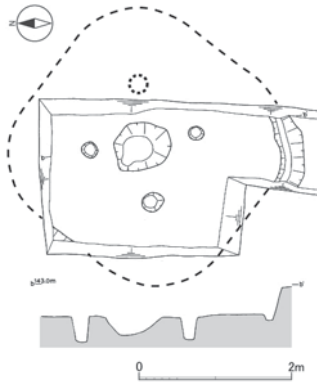


図10 SH-90E2 平面図

何れも脚台が七点で、四脚台、III式、II式及びIII式とよばれているタイプである。脚台II式が四脚台、III式が七点で、

いずれも脚台が付く型式で、脚台II式及びIII式とよばれているタイプである。脚台II式が四脚台、III式が七点で、

し形状が異なる。胴部下半が膨らみ、底部は丸底となる。口径五〇センチメートル、器高七〇センチメートルの土器である。製塩土器は二型式の土器が確認されている。いずれも脚台が付く型式で、脚台II式及びIII式とよばれているタイプである。脚台II式が四脚台、III式が七点で、

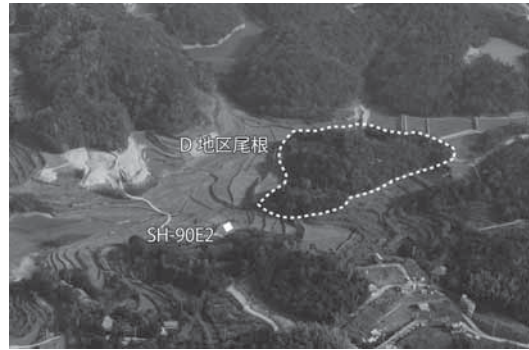


図9 SH-90E2 の検出位置

部だけが残る状況から、製塩作業に使用された土器の可能性が高い。

製塩土器は、D地区尾根から離れた北西の尾根裾で検出された竪穴建物跡SH-90E二からも出土している(図9)。この建物は、平面が一辺三、五メートルの隅丸方形で、四本柱の建物である。(図10) この建物跡からは五六個体もの製塩土器がまとまって出土している。

出土した製塩土器はいずれも脚台III式に分類される土器で、南尾根土器群で出土している土器と同じ型式の土器である(図8)。全て脚台部だけが残る状態である点は、土器群出土の製塩土器と同様である。共伴する土器は終末期の土器であり、南尾根土器群と同時期の製塩土器と考えられる。

五、鉄器製作遺跡で出土する漁具

(1) 鉄器製作と漁具との関係

海岸から二〜三キロメートルも離れた標高一五〇メートルを超える丘陵上で出土する漁具は、海とは隔絶した感が否めない環境にあるこれ

らの遺跡が海との強いつながりを持っていたことを物語っている。

まず、五斗長垣内遺跡ではイイダコ壺が出土しているが、小さな破片も含め一〇点とその数は少なく、日常的に使用された可能性は低い。集落全体の七〇パーセント近くの範囲が調査された中の出土状況であることを考慮すれば、その蓋然性は高い。さらに、それらの出土する地点が特定の場所に限られることもそれを反映している可能性が高く、しかも何か特別な用途に用いられたことを示唆しているのではなからうか。その一つが、大型鍛冶工房建物が集中する範囲であることは、それが鉄器製作と深い関係性を有していたことを想定させるものである。

舟木遺跡で出土する漁具も、祭祀域と考えられる場所に集中する傾向が認められる。日常生活の場から独立するように設けられた場所は、そこが特別な空間であったことを物語っており、そこに供された漁具も特別な意味を持っていた可能性がある。さらに、そこには多数の鉄器が供されており、そこでも鉄器との関係性の深さをみることで

できる。

このように、鉄器製作遺跡で用いられた漁具は、それらを用いて得られる生産物が鉄と同様に重要な物資として位置づけられており、それらは集落を支えたであろう鉄器製作とも深い関係にあったことがうかがえる。

弥生時代の鉄器製作については、素材が列島内で製作されたものか、あるいは列島外で製作されたものかについては双方の意見があり、未だ決着をみていない状況ではあるが、少なくともこれらの遺跡で素材を生産した遺構や遺物は確認されておらず、鉄器製作に用いられた素材は集落の外から供給されたものと考えられる。そのような中、五斗長垣内遺跡の鍛冶工房で出土している船載の鉄器は、素材が列島外で生産された可能性を想定させる遺物でもある。その場合、素材の入手に海路の存在は極めて重要なものとなる。漁具の出土にみられる海とのつながりは、素材の入手にも重要なものであり、そこには海を介するネットワークとそれを担う人々の存在が想定される。島という環境にあるこれら遺跡で行われた鉄器製作には

海との関係性が極めて重要なものであり、そこで出土する漁具は、鉄器製作が海との関係の中で維持されていたことを物語っているといえよう。

(2) 製塩土器の役割

舟木遺跡で出土した漁具の中に、五斗長垣内遺跡では出土していない製塩土器がある。それが両遺跡で出土する漁具の大きな違いの一つである。舟木遺跡で出土する製塩土器の役割については、それを用いて生産された塩と祭祀との関係性を指摘する見方がある。確かに、祭祀の場に伴う土器群の中から多くの鉄器とともに出土している状況は、鉄器と同様に重要な物資として位置づけられ、祭祀などの特別な用途に用いられた塩の役割を想定させるものである。

そのような中、竪穴建物跡SH—九〇E二からは五六個体の製塩土器が出土している。それらは全て脚台Ⅲ式に分類できるものであり、祭祀の場で出土した土器と同じ型式のものである。同時期に使用されたと考えれば、祭祀との関係性を有することは否定することはできない。しかし、祭祀

の場で出土した製塩土器の点数が二一点であり、その内脚台Ⅲ式は七点である。それに対して、一棟の竪穴建物跡から五六個体もの製塩土器が出土する状況や、それが祭祀域の設けられたD地区尾根から離れた場所に位置していることは、他の用途にも使用された塩が存在したことを想定させる。

現物が残らない塩の用途については想像の域を出ないが、すでに想定されている祭祀のほかに、食用や加工などに用いられていたことを考えても良いのではなからうか。さらに想像をたくましくするならば、鉄器の用途として指摘されているような手工業生産や漁撈生産物の加工などに役立つていたことも考えられる。そうであったとするならば、海を介するネットワークを有する集落にとつて、塩そのものを含むそれらの品は交易品として用いられ、それは舟木遺跡における鉄器製作にも重要な役割を担っていたことも想像できる。祭祀域から離れた竪穴建物跡で多量に出土する製塩土器は、そのような役割を持った塩が存在していたことを示唆しているのではなからうか。

現在、淡路島で確認されている最も古い型式の

製塩土器は、脚台Ⅰ式とよばれるタイプの土器で、土器の底に丈高な脚部が付くことを特徴とする。それは後期後半期に使用されたものとされており、現在のところ、淡路島の土器製塩はその時期には始まっているものと考えられている。

舟木遺跡の製塩土器は、それに続く脚台Ⅱ式、Ⅲ式とよばれるタイプの製塩土器である。従来、淡路島の製塩土器編年ではⅡ式が弥生時代終末期、Ⅲ式は古墳時代前期に使用された土器とされてきた。事実、脚台Ⅱ式製塩土器は貴船神社遺跡などで終末期の土器が伴っており、引野遺跡や釜口浜田遺跡では脚台Ⅲ式製塩土器に古墳時代前期の土器が伴うことが確認されている。しかし、今回舟木遺跡で出土した製塩土器に伴うのは終末期の土器であり、古墳時代前期の土器は含まれない。このことから、これらの製塩土器はいずれも終末期に使用された可能性が高い。大阪湾岸では、舟木遺跡で出土した脚台Ⅲ式に並行すると考えられる製塩土器の使用が終末期に遡ることが指摘されており、淡路島においても脚台Ⅲ式土器は細分することでき、舟木遺跡で出土している型式の製塩

土器は終末期に使用されたものと考えたい。

その時期が五斗長垣内遺跡で鉄器製作が終焉を迎え、鍛冶工房建物が姿を消している時期にあたることも注目すべき点である。その時期の舟木遺跡は、鉄器製作を背景に最大の面積を有した時期から範囲が縮小しはじめ、D地区尾根に集約されていく時期である。そのような時期に登場する製塩土器は、終焉を迎えようとする鉄器製作に代わり、暮らしを支える新たな手段として土器製塩が位置づけられはじめたことを示唆しているものはなからうか。しかも、それが祭祀の場に供されている状況は、集落の基盤を支えた鉄器のように、この集落にとって重要な物資として位置づけられはじめていたことを示している可能性もある。

六、まとめ

以上のように、淡路島の弥生時代の集落で営まれた鉄器製作は、それらの遺跡で出土する漁具を用いた人々と深い関係を有していたことがみとれる。仮に「海の民」とでも呼ぶそれらの人びとは、

出土する漁具を用いた漁撈生産はもとより、漁撈生産の場となった海を介するネットワークを保持し、それが鉄器製作にも大きな役割を担っていた可能性がある。特に、舟木遺跡においては、祭祀の場に供された鉄器と漁具のあり方などから、その関係性の強さをうかがうことができ、集落の構成に深く関与していた可能性を想定してもよいのではなからうか。

舟木遺跡で出土する製塩土器は、塩が重要な物資として鉄器製作とも深く関係していたことをうかがわせるものでもあるが、五斗長垣内遺跡では出土していない。それは、五斗長垣内遺跡の鉄器製作が終わり、集落が姿を消そうとする中、舟木遺跡の集落が存続できた要因に塩が存在したこと、を想定させるものでもある。鉄器製作を手放さざるを得なくなる社会が到来する中、存続できた集落とそうでなかった集落の違いは、鉄器製作に特化した「鍛冶のムラ」とより強い海とのつながりを有した「丘陵上遺跡群の中心的集落」との違いであったのではなからうか。そこには、王権との深い関係を持った「海人」が活躍する古墳時代に、

彼らの重要な生業として位置づけられる土器製塩があつた可能性も透けて見える。

島北部の丘陵上に急増した集落が一斉に姿を消していく時期もこの時期に重なる。鉄器製作の終焉と土器製塩の本格化は、島の弥生集落の動態を理解する上でも重要な視点になるものと思われる。

一方、島内で確認されている最古段階の製塩土器が使用された弥生時代後期後半は、これらの集落で鉄器製作が盛期を迎える時期に重なる。この一致は、土器製塩の始まりと鉄器製作の進展に何らかの関係があつたことを想起させるものであり、淡路島における弥生時代の鉄器製作を理解する上でも重要な視点となる可能性がある。

五斗長垣内遺跡の出土土器の中に、舟木遺跡で出土した土器を遡る時期の製塩土器が存在する可能性が指摘されている。現在のところ、その土器は一点だけであり、それが製塩土器か否かについては今後、類例の増加を待つ必要があると考えるが、もしそうであつたとするならば、それが使用された時期は鉄器製作開始時期あるいはそれ以前にまで遡る可能性がある。鉄器製作と土器製塩と

の関係性を理解する上での重要な資料であり、今後、注視する必要がある。

さらに、今回は、淡路島の二遺跡を対象として弥生時代の鉄器製作と漁具との関係について検討してきたが、例えば日本海沿岸地域の遺跡における釣針やモリ・ヤス、錘、アワビオコシなどの漁具と鉄器製作との関係もすでに多く論じられているところである。弥生時代の鉄器製作と漁具との関係性を検討する上では、他地域との比較検討も必要な視点となる。

今回検討に及ばなかったこれら鉄器製作と漁具との関係を考える上での多くの視点は、今後の課題としたい。

- (1) 中塚武・若林邦彦・樋上昇編『気候変動から読み直す日本史三 先史・古代の気候と社会変化』臨川書店、二〇二〇
- (2) 伊藤宏幸ほか『舟木遺跡1(B・D地区の調査)』淡路市教育委員会、二〇二〇
- (3) 村上恭通「弥生時代鍛冶遺構の諸問題〜鍛冶炉構造を中心に〜」『五斗長垣内遺跡発掘調査報告』淡路市教育委員会、二〇二一

(4) 本稿では、『舟木遺跡1(B・D地区の調査)』で用いた年代観に従い、布留式期以降を古墳時代とし、庄内式期は弥生時代終末期として扱う。

(5) 村上恭通「淡路・舟木遺跡の鉄器をめぐる諸問題」『舟木遺跡1(B・D地区の調査)』淡路市教育委員会、二〇二〇

(6) 浦上雅史「鉄器製作集団による祭祀の一形態―淡路島舟木遺跡の調査から―」『郵政考古紀要』第七八号(通巻八七冊)大阪・郵政考古学会、二〇二一

(7) 浦上雅史『淡路島の古墳時代』洲本市立淡路文化史料館、一九九三

(8) 伊藤宏幸『貴船神社遺跡(製塩遺跡)』北淡町教育委員会、二〇〇二

伊藤宏幸『引野遺跡発掘調査概要』東浦町教育委員会・東浦町、一九九九

伊藤宏幸「釜口浜田遺跡」『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報1』津名郡町村会、一九九九

(9) 積山洋「大阪湾岸の古墳時代の土器製塩」『季刊考古学・別冊14畿内の巨大古墳とその時代』雄山閣、二〇〇四

(10) 大久保徹也「土器製塩の展開―備讃瀬戸海域周辺を中心に―」『製塩土器からみた播磨』第21回播磨考古学研究会実行委員会、二〇二一